

健康メディカル学部 言語聴覚学科

教育方法と教育の特色ある工夫

本学の各学科・コースは、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー、以下 CP）に基づき、それぞれの特色を活かした教育方法による授業を行っています。さらに、資格取得科目の充実など、教育方法に工夫を重ねながら、教育内容の向上に取り組んでいます。

【教育方法】

幅広い知識と言語聴覚士としての専門能力を身につけるために、教養教育、知識や技能を修得する専門教育、更にそれらを統合する臨床実習を行っています。

教養教育では、「フレッシュセミナー」「アドバンスセミナー」において、言語聴覚士としての職業意識を高める様々な教育活動を行い、専門科目の学びへとつなげています。専門教育では、言語聴覚障害学に関連する「専門基礎科目」、講義と演習・実習形式の「専門科目」を配置し、言語聴覚士として必要な失語症・高次脳機能障害、言語発達障害、発声発語障害、摂食嚥下障害、聴覚障害などに関する専門的知識や技能が、段階的に修得できるようにしています。臨床実習については、見学実習、評価実習、総合実習と3段階に分けて実施し、臨床能力が確実に身につくようにしています。

【教育の特色ある工夫】

- ・ 各学年の少人数クラスの「フレッシュセミナー」「アドバンスセミナー」では、個別面談を充実させ細やかな学修支援を行っています。
- ・ 1、2年次の「フレッシュセミナー」では、社会人としてのマナー・キャリア教育の実施や、現任言語聴覚士である卒業生の講演を聴講する機会を設けて、言語聴覚士としての職業意識を培う取り組みを行っています。また、ボランティア入門講座や認知症サポーター養成講座を開催し、対人コミュニケーションスキル（対人援助の基本的スキル）の習得につなげています。
- ・ 専門科目の演習・実習では、1クラスを小グループに分け、臨床実習に向けてきめ細かく実技指導を行っています。2年次では「言語聴覚障害評価指導」、3年次では、「言語聴覚障害総論」の受講を通して言語聴覚士としての態度及び総合的な知識、臨床能力の段階的向上を目指して指導を行っています。
- ・ 3年次の評価実習開始前には、「言語聴覚障害臨床演習」をはじめ、各専門科目の実習の授業では、OSCE（客観的臨床技能試験）に準ずる評価を取り入れています。さらに、学内外の講師によるガイダンスを実施し、実習前教育の充実を図っています。
- ・ 3年次の「リハビリテーション画像診断学」の受講、および喀痰吸引実習や帝京大学医学部での解剖学実習の実施などにより、より幅広い知識や技術を習得し（臨床場面での）実践力を高める工夫をしています。また、「多職種連携論」の受講を通して、学科や職種を超えた学生との協働学習を通し、他の専門職を理解し医療チームの全体を俯瞰する視点を養っています。

- ・ 臨床実習については、2 年次に医療機関の見学実習(1 週間)、3 年次に主に小児・聴覚系の関連施設等での見学実習(1 週間)、評価実習(4 週間)、4 年次に総合実習(8 週間)を配置し、段階的に臨床能力を育成しています。
- ・ 特に4 年次では、総合実習修了後の報告会を通して、臨床の実践に必要な情報の分析・統合能力、プレゼンテーション・ディスカッション能力を養っています。